鳥羽清港会×鳥羽市
共同企画第３弾

鳥羽の海を わたしたちで守っていこう

鳥羽清港会事務局・環境課　☎ 25 1147

海っておもしろいんだよ。
海の生きものに触れていると、
いろんなことを学べるんじゃないかな。

鳥羽市立海の博物館
館長　**平賀　大蔵**　さん

海の博物館
ホームページ

今回は、鳥羽清港会と鳥羽市の共同企画第３弾として鳥羽市立海の博物館の平賀大蔵さんに、鳥羽の海について伺いました。

伊勢湾の生きものが減っている

三重県沿岸では、海のゆりかごと呼ばれる海草のアマモ場が60年前に比べると100分の1の量に減少したと言われていて、海底に棲むカレイやキス、タコ、アナゴが減り、車エビはほとんどいなくなってしまいました。ここ5年、コウナゴは全く捕れなくなってしまいました。

なぜ生きものが減っているの？

海の『貧栄養化』が大きく関わっていると思っています。昭和30～50年代にかけて赤潮が頻発したため、その対策として流域下水道などを整備し、窒素やリンなどの栄養類を取り除いた水を海へ流しました。赤潮の発生は抑えられましたが、その結果、窒素やリンを栄養とする食物プランクトンが減り、海の生きものが減ってしまったのだと考えています。そのほかにも、『ダムの建設』や『河口堰の整備』、『海底のヘドロ化』や海底に酸素のない水が広がる『貧酸素水塊』の発生、鳥羽海域に高水温と異常潮位をもたらす『黒潮の大蛇行』が続いており、これらの影響も受けていると思われます。

未来のために歴史を伝える

奈佐の浜（答志島）では、海ごみが問題になっていますが、海の博物館では開館当初から海を守る活動『SOS（SaveOurSea）運動』を実施し、30年以上前から海ごみについて警鐘を鳴らしてきました。海ごみを減らすために必要なことは、私たちがごみを出さないようにすることと、出たごみを適正に処理することです。

最近では、SDGs（持続可能な開発目標）が注目されていますが、漁師や海女は百年以上前から小さな伊勢エビや鮑は捕らないなどルールを決めて漁を続けてきました。こうした歴史にもっと目を向けてもらいたいし、伝えていかなければいけないと思っています。

以前、博物館に来て一緒に学習したある生徒が「昔の人のことをなめていました」と話してくれました。「なぜこんな決まりを作ったのだろう？」「この古い道具は、誰が何のために作ったのだろう？」と疑問を感じ、見聞きし考えることで、子どもたちの心が育まれると思います。

博物館では、磯やアマモ場の生きものに触れる体験教室を開催したり、小学生とのアマモ場の再生にも取り組んでいます。実際に海や海の生きものに触れることで、海っておもしろいと感じ、興味を持ってもらうことが未来の海を守ることにつながっていくと信じています。

アマモ場再生の取り組み
アマモの種を容器に入れる児童

新規会員募集中！

鳥羽清港会では、一緒に鳥羽の海を守っていく企業、団体を募集しています。申込方法などくわしくは、鳥羽清港会ホームページをご覧ください。

季刊誌「海とにんげん＆SOS」

海の博物館は開館以来続けている海の環境問題を考えるSOS（Save Our Sea）運動に関する情報や博物館の情報を伝えています。